Reactor Physics Asia 2017（RPHA2017）報告

東京工業大学　　小原　徹

2017 年 8 月 24 日～25 日に中国・成都において、第 2 回の Reactor Physics Asia 2017（RPHA2017）が開催されました。本シンポジウムは、日本、中国、韓国の各原子力学会の炉物理部会の覚書により始まった会議で、2015 年に第 1 回のシンポジウムが韓国済州島で開催されています。シンポジウムには、日本原子力学会炉物理部会の代表として部会長小原が参加しました。簡単ではありますが、シンポジウムへの参加を通した雑感を記して、2019 年に日本原子力学会炉物理部会が開催を予定している RPHA2019 に向けて情報を共有できればと思います。

会場となったホテルは中国成都市の Minya Hotel です。成都は有名な歴史都市であり開催地としては申し分ありませんでした。参加人数については、日本からの参加が少なく、他の国より取り組みが希薄と若干思われてもしかたない状況だったかもしれません。それでも、各国の部会長が参加してプレナリートークが行われた際に日本原子力学会炉物理部会長として今回の開催について中国側への感謝の意を表明したことで日本の炉物理部会のプレゼンスを示すことは出来たと思います。

今回の開催に当たっては Nuclear Power Institute of China (NPIC)からかなりの経済支援をうけていたように見えました。ホテルの会場はきれいで、多数のスタッフがおり、シンポジウム当日の運営自体はスムーズでした。ゲストに対する手厚い対応も目立っており、参加者にはコービーブレークでの茶菓のほか、会議前日の夕食、シンポジウム中の昼食、夕食がすべて主催者持ちでホテルのレストランで提供されました。また、参加者全員に対して、シンポジウムプログラム、プロシーディングスの CD、ノート、ペンの他、シンポジウムバッグ、陶器のパンダの置物（箱入り）が配られました。

一方、シンポジウム全体としてのバンケットがなく、ただ参加者が勝手にビュッフェで食事をするだけだったので、参加者同士の交流という面ではものたりなかったのも事実です。質素でもいいから会議中にバンケット or レセプション的なものはやはり必要であると感じました。

論文については、事前の査読体制が十分だったとはいえないかもしれません。またプログラムがシンポジウムの数日前に WEB で公開される(かつ公開された旨の連絡はこなかった)など、参加者への情報提供にも混乱がありました。本シンポジウムでは、学生へのベストペーパーアワードを贈呈がありましたが、これについての運営にも混乱があったように見えました。日本で開催する場合は運営面での綿密な準備が不可欠と思います。

各国とも参加者のほとんどが若手研究者・学生だったのはシンポジウム開催の主旨にかなっていてよかったと思います。中国・韓国の若手発表者は英語の受け答えがしっかりしており、積極的に質問・発言していたのに対して、日本の若手・学生参加者の存在感があまり

感じられなかったのは残念でした。人数が少ないこともありますがそもそも発言が少なかったように思います。シャイということもあるかもしれませんが、中韓の若手は自分の研究分野以外のことにも積極的に質問しているように見受けられ、自分の研究分野以外についても広く知識を持っているように感じました。

会議全体を振り返ると、今回の中国開催は、前回の韓国開催ほどデラックスではなかったものの、参加者に手厚いもてなしを施していたと思います。ただし、日本開催の際には、これまでの韓国や中国での開催のスタイルにとらわれる必要はないと個人的には思います。むしろ、会議としての中身をしっかりしたものにすることが一番大切なことと思っています。

（2018 年 3 月 8 日記）